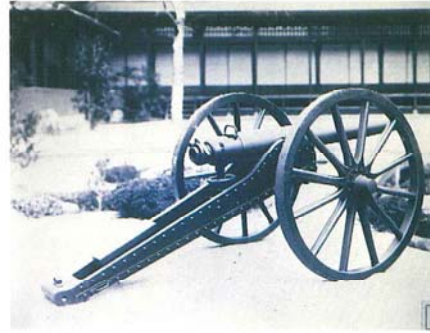


七 埋^{うず}もれていた日本初の青銅製大砲^{たいほう}

— 西洋科学の先駆^{さきが}けの地 武雄^{たけお} —



アームストロング砲(鍋島報效会蔵)

ヒューウ……ドカーン。

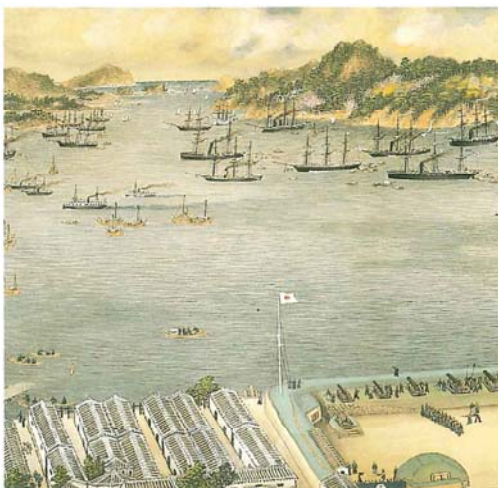
一八六八年(明治元)、奥羽(今の東北地方)の山野で大砲の爆音^{ばくおん}が鳴り響^{ひび}いていました。この大砲は、「武雄の大砲」と呼^よばれ、戊辰戦争^{ぼしん}において旧幕府軍^{きゅうまくふ}を大いに苦しめました。当時、倒幕側^{とうばく}であつた佐賀藩武雄領^{さかはん}の軍隊は、科学技術の最先端^{せんたん}「アームストロング砲」をもつ最新の西洋式軍隊だつたのです。

江戸時代^{えど}の日本は、中国・オランダ以外の国とは貿易をしないという鎖国政策^{さこくせいさく}を続けていました。そのような日本にあつて、

幕末にいち早く西洋科学を取り入れたのが佐賀藩でした。そして、この佐賀藩の西洋科学の先駆けとなつたのが、「武雄領」だつたと言われている。

徳川幕府の直轄地^{ちよつかつち}であつた長崎は、佐賀藩と福岡藩が一年交代で警備^{けいび}に当たっていました。第二十八代武雄領主鍋島茂義^{なべしましげよし}(一八〇一〜一八六三)は、佐賀藩の行政の最高責任者を務めており、警備状況^{けいびじょうきょう}などの視察^{しさつ}のために長崎へ出向くことも多く、出島に住むオランダ人の機器を見て、西洋科

長崎港砲台図 (鍋島報效会蔵)



学の優秀ゆうしゅうさに驚おどろきました。

一八〇八年、イギリス船が長崎港に不法に侵入しんにゅうするといふ事件が起りました。当時、アジアへ進出していた欧米諸国おうまいしよこくが、鎖国を続ける日本にも迫せまってきたのです。このような時代の流れの中で、茂義は、軍備をはじめとする西洋科学の導入に力を入れたのでした。

茂義は、長崎の高島秋帆たかしましゅうはんが西洋砲術に詳くわしいことを知り、一八三二年、家臣かしんの中から平山醇左衛門ひらやまじゆんざえもんを秋帆

の弟子でしとして、長崎へ送りました。秋帆のもとで西洋砲術の技術を修得した醇左衛門は、武雄に帰って西洋砲術の道場を開き、領内や佐賀本藩の家臣に教え始めました。



高島秋帆鑄造の青銅砲（モルチール砲）（武雄市教育委員会蔵）



武雄領鑄造の青銅砲（武雄市教育委員会蔵）

一八三五年、秋帆に依頼いらいしていた青銅製大砲※（モルチール砲）が、茂義に届とどけられました。その大砲には鍋島家の家紋「抱だき銀杏いちよう」が銀ではめ込まれ、「日本における最初の鑄造」とオランダ語で書いてありました。これが、「日本で、そして日本人の手によって初めて作られた大砲」です。

茂義は、その大砲をもとに、武雄領内の「二の丸」（今の佐賀県立武雄高等学校内）に建てた大砲鑄造所で、翌年までに青銅製の砲を完成させています。その後、佐



オランダからとり寄せた書物
(佐賀県立武雄高等学校保管)

賀本藩が、一八五二年ごろまでに鉄製の西洋式大砲を完成させていますが、これは武雄領の進んだ科学技術の蓄積ちくせきなどがあつたからだと
言われています。

また、それ以外の分野でも武雄領では進んだ西洋科学を取り入れて
いました。当時、佐賀領内では天然痘てんねんとうが流行し、多くの人が亡な
なっていました。長崎に住む藩医ならばやし榎林宗健そうけんは、イギリスでは種痘しゅとうを
行い天然痘を未然に防いでいるという話を聞いて、これを第十代佐
賀藩主鍋島直正なおまさに伝えました。それを聞いた直正は、一八四九年、

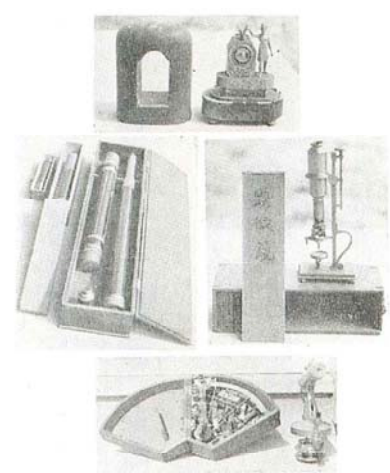
自分の息子むすこに種痘を行わせました。歴史上では、これが日本における最初の種痘であると言われていますが、
実は武雄領ではこれより十二年ほど前に、茂義が息子の茂昌しげまさに種痘を行かせたという話も残っています。茂

義の西洋科学の導入に対する並々なみなみならぬ意欲が伝わってきます。

茂義のあとを継ついだ第二十九代領主茂昌も幕末の国内外の様子ようす
をよく見ており、一八四九年にはイギリスから工作機械こうさくきかいを購入かうにゆう
し、今の武雄市文化会館の敷地しきち内に建てた工場しょうじょうで、最新の七連発
スペンセル銃じゆうを製造しています。

一八六七年、第十五代將軍慶喜しょうぐんよしのぶは、大政奉還たいせいほうかん(朝廷ていていに政権せいけんを返
すこと)を行いました。これを受け、倒幕側たうぼくがわは、王政復古おうせいふこの※大号

幕末ヨーロッパから輸入された諸器具
(武雄市教育委員会蔵)
(上) オルゴール (中左) 望遠鏡 (中右) 顕
微鏡 (下) 測量器具 (オランダ・アムステル
ダム製)



幕末ヨーロッパから輸入された諸器具

令を出して、新（明治）政府を作りました。こうして約二百六十年続いた徳川幕府は倒れ、鎌倉幕府以来およそ七百年続いた武家政治は終わりました。しかし、これに不満をもつ旧幕府側の一部が函館に立てこもり、また、会津藩などの奥羽諸藩も最後まで新政府に抵抗しました。これが初めに述べた戊辰戦争です。

この戦争で、茂昌率いる武雄軍は、アームストロング砲と七

連発スペンセル銃を使って、旧幕府軍

を苦しめ、天下にその名を轟かせました。その後、一八七四年に「佐賀の乱」が起きました。この時、「武雄の大砲」は、新政府に反抗しないことを明らかにするため、土中深く埋められたのです。そして、「武雄の大砲」は人知れず姿を隠し、人々から忘れ去られてしまいました。

一九三五年、旧武雄領主邸の庭で、つつじの木に肥料をやるために土を掘った時、「日本で、そして日本人の手によって初めて作られた大砲」は、再び光を見ることがになりました。一八三五年に作られてちょうど百年目に当たる年に発見されたことは、単なる偶然ではないように思えてなりません。



スペンセル銃（佐賀県立博物館蔵）